

## ヨハネ 12 章 1-8 節 「奉仕の心」

私たちは、キリスト者として、教会において、様々な業を担うことによって、奉仕をします。では、「奉仕」とは何でしょうか。誰に対するものでしょうか。奉仕をする時の姿勢を、「ナルドの香油」として有名な今日の箇所から学んでいきましょう。

直前の11章で、主イエスがラザロをよみがえらせています。これは、ご自身が復活であり命であることを示された大事な出来事でした。兄弟ラザロが復活した喜びと感謝を、夕食を振る舞うことによってマルタは現したかったのでしょうか。彼女は彼女なりに、精一杯に主イエスに奉仕していたのです。そしてマリアは、マルタと全く違った仕方で主イエスに仕えます。マリアは、主イエスの足に香油を注いだのです。油を注ぐ行為、旧約聖書では王や祭司や預言者といった職務に神によって立てられ即位する者に対する儀式です。すなわちマリアが、主イエスのことを王、祭司、預言者として、また、神の子、救い主として受け入れた。そしてそればかりでなく、マリアは主イエスの死をも意識していたのです。自分自身の命が、この方の死によって担われている。だからこそ、主イエスの体に最高の香油を注がずにはいられなかったのです。それこそが、自分の出来る最高の奉仕だったのです。

しかし、このマリアの主イエスの奉仕に対して、ユダが批判します。おそらくこの場にいた他の弟子たちも、現代を生きる私たちも、そう思うでしょう。マリアは自分自身の最も大切なものを捧げました。その行為をユダは素直に喜ぶことが出来ませんでした。自分の在り方を正当化し、守ろうとする人間的な思いがあったと言えます。自分には到底出来ない奉仕を見て、それを批判したのです。そんなユダに対して、主イエスはおっしゃいます。マリアが行った奉仕の業が、主イエスの十字架の死のための備えであると。マリアの奉仕を喜んで受け入れて下さったのです。すると「家は香油の香りでいっぱいになった」。マリアの奉仕によって、この家の中は香油の香りで一杯になりました。それを主イエスは、ご自身の死への備えとして受け入れて下さったのです。世には、死の匂いが満ちています。人間の罪が覆っています。私たち自身も、そのような力に支配されて生きています。しかし、主イエスのもとに集められ、そこで、本当にこの方が、十字架によって私たちの死を担って下さり、神から離されるという死の苦しみを私たちに代わって経験して下さったことを示される時、私たちは、この救いを受け入れるのです。そして、このことを受け入れる時にのみ、この方に倣って、自分自身を捧げるものとされるのです。主イエスが共にいて下さる場所で、共に食卓を囲みつつ、自分自身を捧げる時、教会は、香油の香りでいっぱいになるのです。ここに私たちの主イエスへの真の奉仕の姿があるのです。

奉仕すること。それは主に仕えるということ。そして主イエスに奉仕するとは、主イエスが私たちの死を担って下さることを示される中で、自らを捧げることに於いてなされることです。それは、香油に匹敵するような多くの財産を捧げれば良いというわけではありません。主イエスの十字架の死と復活の御業に触れて、その喜びと感謝の中で自らを捧げるということが大切なのです。自分自身が決して担うことが出来ない苦しみを主イエスが担って下さり、死の力から解放して下さっていることを知らされる中で、自身の出来る限りを捧げて礼拝する者とされるのです。すると、あなたの生き方が奉仕になる、ということです。「奉仕」の意味。あなたが奉仕しているのは、教会組織でしょうか。それとも、目の前の一人でしょうか。キリストの香りを放つ者として、主イエスへの奉仕によって私たちの生き方が示されていくようにと願います。